

# 雪の日

永井荷風

青空文庫





曇つて風もないのに、寒さは富士おろしの烈しく吹きあれる日よりもなお更身にしみ、火燧こたつにあたつていながらも、下腹したはらがしくしく痛むというような日が、一日も二日もつづくと、きまつてその日の夕方近くから、待設けていた小雪が、目にもつかず音もせず降つてくる。すると路地のどぶ板を踏む下駄の音が小走りになつて、ふつて来たよと叫ぶ女の声が聞え、表通を呼びあるく豆腐屋の太い声が気のせいかわかにわかに遠くかすかになる……。

わたくしは雪が降り初めると、今だに明治時代、電車も自動車もなかつた頃の東京の町を思起すのである。東京の町に降る雪には、日本の中でも他処よそに見られぬ固有のものがあつた。されば言うまでもなく、巴里パリや倫敦ロンドンの町に降る雪とは全くちがつた趣があつた。巴里の町にふる雪はプッチニイが『ボエーム』の曲を思出させる。哥沢うたざわ節ぶしに誰もが知つている『羽織はおりかくして』という曲がある。

羽織かくして、袖ひきとめて、どうでもけふは行かんすかと、

言ひつつ立つて櫛れんじまじ子窓、障子ほそめに引きあけて、

あれ見やしやんせ、この雪に。

わたくしはこの忘れられた前の世の小唄を、雪のふる日には、必ず思出して低唱したいような心持になるのである。この歌詞には一語の無駄もない。その場の切迫した光景と、その時の綿々とした情緒とが、洗練された言語の巧妙なる用法によって、画よりも鮮明に活写されている。どうしても今日は行かんすかの一句と、歌麿が『青楼年中行事』の一画面とを対照するものは、容易にわたくしの解説に左袒するであらう。

わたくしはまた更に為永春水の小説『辰巳園』に、丹次郎が久しく別れていたその情婦仇吉を深川のかくれ家<sup>が</sup>にたずね、旧歡をかたり合う中、日はくれて雪がふり出し、帰ろうにも帰られなくなるという、情緒纏綿とした、その一章を思出す。同じ作者の『湊の花』には、思う人に捨てられた女が堀割に沿うた貧家の一間に世をしのび、雪のふる日にも炭がなく、唯涙にくれている時、見知り顔の船頭が猪牙舟を漕いで通るのを、窓の障子の破れ目から見て、それを呼留め、炭を貰うというようところがあつた。過ぎし世の町に降る雪には必ず三味線の音色が伝えるような哀愁と哀憐とが感じられた。

小説『すみだ川』を書いていた時分だから、明治四十一、二年の頃であつたらう。井上唾々さんという竹馬の友と二人、梅にはまだすこし早いが、と言いながら向島を歩み、百

花園やつかえんに一休みした後、言問ことといまで戻つて来ると、川づら一帯早くも立ちまよう夕靄ゆうもやの中から、対岸の灯がちらつき、まだ暮れきらぬ空から音もせず雪がふつて来た。

今日もとうとう雪になつたか。と思うと、わけもなく二番目狂言に出て来る人物になつたような心持になる。浄瑠璃を聞くような軟い情味が胸一ぱいに湧いて来て、二人とも言い合いあしたようにそのまま立留つて、見る見る暗くなつて行く川の流を眺めた。突然耳元みみもとかく女の声こゑがしたので、その方を見ると、長命寺ちやうめいじの門前かどまへにある掛茶屋かかぢやのおかみさんが軒の下したの床しやうぎ几ぎに置いた煙草盆せんそうぼんなどを片づけているのである。土間どまがあつて、家の内の座敷ざしきにはもうランプがついている。

友達ともだちがおかみさんおかみさんを呼んで、一杯いっぱいいただきたいが、晩おそくて迷惑めいわくなら壘びんづめ詰づめを下くださいと言いうと、おかみさんは姉様あねさまかぶりにした手拭てぬぐいを取りながら、お上あがんなさいまし。何も御在ございませんがと言いつて、座敷ざしきへ座布団ざぶとんを出して敷敷いてくれた。三十さんじぢかい小づくりこづくりの垢あかぬけ拔へした女おんなであつた。

焼海苔ちやうしに鮎あし子こを運こんだ後、おかみさんはお寒いじや御在ございませんかと親おやし気きな調子ていしで、置おき火こ燧たを持もち出してくれた。親切しんせつで、いや味がなく、機転きてんのきいている、こういう接待せいたいぶりもその頃ころにはさして珍しいというほどの事ことでもなかつたのであるが、今日けふこれを回想こくわうし

て見ると、市街の光景と共に、かかる人情、かかる風俗も再び見がたく、再び遇いがたきものである。物一たび去れば遂にかえつては来ない。短夜みじかよの夢ばかりではない。

友達が手酌てじやくの一杯を口のはたに持つて行きながら、

雪の日や飲まぬお方のふところ手

と言つて、わたくしの顔を見たので、わたくしも、

酒飲まぬ人は案山かかし子の雪見哉かな

と返して、その時銚子のかわりを持つて来たおかみさんに舟のことをきくと、渡しはもうありませんが、蒸気は七時まで御在ますと言うのに、やや腰を据え、

舟なくば雪見がへりのころぶまで

舟足を借りておちつく雪見かな

その頃、何や彼かや書きつけて置いた手帳は、その後いろいろな反古ほごと共に、一たばねにして大川へ流してしまつたので、今になつては雪が降つても、その夜のこととは、唯人情のゆるやかであつた時代と共に、早く世を去つた友達の面影がぼんやり記憶に浮んで来るばかりである。



雪もよいの寒い日になると、今でも大久保の家の庭に、一羽黒い山鳩の来た日を思出すのである。

父は既に世を去って、母とわたくしと二人ぎり広い家にいた頃である。母は霜柱の昼過までも解けない寂しい冬の庭に、折々山鳩がたった一羽どこからともなく飛んで来るのを見ると、あの鳩が来たからまた雪が降るでしょうと言われた。果して雪がふったか、どうであったか、もう能くは覚えていないが、その後も冬になると折々山鳩の庭に来たことだけは、どういうわけか、永くわたくしの記憶に刻みつけられている。雪もよいの冬の日、暮方ちかくなる時の、つかれて沈みきった寂しい心持。その日その日に忘られて行くわけもない物思わしい心持が、年を経て、またわけもなく追憶の悲しさを呼ぶがためかも知れない。

その後三、四年にしてわたくしは牛込の家を売り、そこ此処と市中の借家に移り住んだ後、麻布に来て三十年に近い月日をごした。無論母をはじめとして、わたくしには親しかった人たちの、今は一人としてこの世に生残っていようはずはない。世の中は知らない

人たちの解しがたい議論、聞馴れない言葉、聞馴れない物音ばかりになった。しかしそのむかし牛込の庭に山鳩のさまよつて来た時のような、寒い雪もよいの空は、今になつても、毎年冬になれば折々わたくしが寐ている部屋の硝子窓ガラスまどを灰色にくもらせる事がある。

すると、たちまち忽あの鳩はどうしたろう。あの鳩はむかしと同じように、今頃はあの古庭の苔の上を歩いているかも知れない……と月日の隔てを忘れて、その日のことがありありと思返されてくる。鳩が来たから雪がふりましようと言われた母の声までが、どこからともなく、かすかに聞えてくるような気がしてくる。

回想は現実の身を夢の世界につれて行き、渡ることのできない彼岸を望む時の絶望と悔恨との淵に人の身を投込む……。回想は歓喜と愁歎との両面を持つている謎の女神である。



七十になる日もだんだん近くなつて来た。七十という醜い老人になるまで、わたくしは生きていなければならぬのか知ら。そんな年まで生きていたくない。といつて、今夜眼

をつぶつて眠れば、それがこの世の終だとなったなら、定めしわたくしは驚くだろう。悲しむだろう。

生きていたくもなければ、死にたくもない。この思いが毎日毎夜、わたくしの心の中に出没している雲の影である。わたくしの心は暗くもならず明くもならず、唯しんみりと黄昏れて行く雪の日の空に似ている。

日は必ず沈み、日は必ず尽きる。死はやがて晩かれ早かれ来ねばならぬ。

生きている中、わたくしの身に懐しかったものはさびしさであった。さびしさのあったばかりにわたくしの生涯には薄いながらも色彩があった。死んだなら、死んだから後にも薄いながらに、わたくしは色彩がほしい。そう思うと、生きていた時、その時、その場の恋をした女たち、わかれた後忘れてしまった女たちに、また逢うことの出来るのは暝いあの世のさむしい河のひとりであるような気がしてくる。

ああ、わたくしは死んでから後までも、生きていた時のように、逢えば別れる、わかれのさびしさに泣かねばならぬ人なのであろう……。



薬研堀がまだそのまま昔の江戸絵図にかいてあるように、両国橋の川しも、旧米もとよねざわ沢町の河岸まで通じていた時分である。東京名物の一銭蒸汽の棧橋につらなつて、浦うらや安通いの大きな外輪そとわの汽船が、時には二艘も三艘も、別の棧橋につながれていた時分の事である。

わたくしは朝寝坊むらくというはなしか噺家の弟子になつて一年あまり、毎夜市中諸処の寄席よせに通つていた事があつた。その年正月の下半月しもはんつき、師匠の取席とりせきになつたのは、深川高橋の近くにあつた、常磐町ときわちやうの常磐亭であつた。

毎日午後しんやに、下谷御徒町したやおかちまちにいた師匠むらくの家に行き、何やかやと、その家の用事を手つだい、おそくも四時過には寄席の楽屋に行つていなければならぬ。その刻限になると、前座ぜんざの坊主が楽屋に来るが否や、どこどんと楽屋の太鼓たいこを叩きはじめる。表口うらぐちでは下足番げそくばんの男がその前から通りがかりの人を見て、入らつしやい、入らつしやいと、腹の中から押出すような太い声を出して呼びかけている。わたくしは帳場ちやうばから火種を貰つて来て、楽屋と高座の火鉢に炭火をおこして、出勤する芸人の一人一人楽屋入るのを待つのであつた。

下谷から深川までの間に、その頃乗るものといつては、柳原を通う赤馬車と、大川筋の一銭蒸汽があつたばかり。正月は一年中で日の最も短い寒かんの中うちの事で、両国から船に乗り新大橋で上り、六間堀ろっけんぼりの横町へ来かかる頃には、立迷う夕ゆう霽もやに水辺の町はわけても日の暮れやすく、道端の小家には灯が付き、路地の中からは干物の匂が湧き出で、木橋をわたる人の下駄げたの音が、場末の町のさびしさを伝えている。

忘れもしない、その夜の大雪は、既にその日の夕方、両国の栈橋で一銭蒸汽を待つていた時、ふいと横よこ面つらを吹く川風に、灰のような細い霰こまかがまじっていたくらいで、順番に樂屋入をする芸人たちの帽子や外套には、宵よいの口から白いものがついていた。九時半に打出し、車でかえる師匠を見送り、表通へ出た時には、あたりはもう真白で、人ツ子ひとり通りはしない。

太鼓を叩く前座の坊主とは帰り道がちがうので、わたくしは毎夜下座げざの三味線をひく十六、七の娘——名は忘れてしまつたが、立花家橋之助たちばなやきつつのすけの弟子で、家は佐竹ツ原だといふ——いつもこの娘と連立つて安宅蔵あたけくらの通を一ツ目に出て、両国橋をわたり、和泉橋際いずみばしきわで別れ、わたくしはそれから一人とぼとぼ柳原から神田を通り過ぎて番町ばんちようの親の家へ、音のしないように裏門から忍び込むのであつた。

毎夜連れ立つて、ふけそめる本所の町、寺と倉庫の多い寂しい道を行く時、案外暖く、月のいい晩もあった。溝川の小橋をわたりながら、鳴き過る雁の影を見送ることもあった。犬に吠えられたり、怪しげな男に後をつけられて、二人ともども息を切って走ったこともあった。道端に荷をおろしている食物売の灯を見つけ、汁粉、鍋焼、餛飩に空腹をいやし、大福餅や焼芋に懐手をあたたためながら、両国橋をわたるのは殆毎夜のことであった。しかしわたくしたち二人、二十一、二の男に十六、七の娘が更け渡る夜の寒さと寂しさに、おのずから身を摺り寄せながら行くにもかかわらず、唯の一度も巡査に見咎められたことがなかった。今日、その事を思返すだけでも、明治時代と大正以後の世の中との相違が知られる。その頃の世の中には猜疑と羨怨の眼が今日ほど鋭くひかり輝いていなかったのである。

その夜、わたくしと娘とはいつものように、いつもの道を行こうとしたが、二足三足踏み出すのが早いから、雪は忽ち下駄の齒にはさまる。風は傘を奪おうとし、吹雪は顔と着物を濡らす。しかし若い男や女が、二重廻やコートや手袋襟巻に身を粧うことは、まだ許されていない時代である。貧家に育てられたらしい娘は、わたくしよりも悪い天気や時候には馴れていて、手早く裾をまくり上げ足駄を片手に足袋はだしになった。傘は一本

さすのも二本さすのも、濡れることは同じだからと言って、相合傘あいがさの竹の柄元えもとを二人で握りながら、人家の軒下をつたわり、つたわって、やがて彼方かなたに伊予橋、此方こなたに大橋を見渡すあたりまで来た時である。娘は突然つまずいて、膝をついたなり、わたくしが扶たすけ起そうとしても容易には立上れなくなった。やつとの事立上ったかと思うと、またよろよると転びそうになる。足袋はだしの両脚とも凍りきって、しびれてしまったらしい。

途法とぼうにくれてあたりを見る時、吹雪の中にぼんやり蕎麦屋そばやの灯が見えた嬉しき。湯氣の立つ饅頭まんじゅうの一杯に、娘は直様すぐさま元気づき、再び雪の中を歩きつづけたが、わたくしはその時、ふだん飲まない爛酒かんざけを寒さしのぎに、一人で一合あまり飲んでしまったので、歩くと共におそろしく酔が廻まわって来る。さらでも歩きにくい雪の夜道の足元が、いよいよ危くなり、娘の手を握る手先がいつかその肩に廻される。のぞき込む顔が接近して互の頬がすれ合うようになる。あたりは高座こうざで噺家はなしかがしゃべる通り、ぐるぐるぐるぐる廻まわっていて、本所ほんじょだか、深川ふかがわだか、処ところは更に分らぬが、わたくしはとかくする中うち、何かにつまずきどしんと横倒れに転び、やつとの事娘に抱き起された。見ればおあつらい通りに下駄げたの鼻緒はなおが切れている。道端に竹と材木が林の如く立っているのに心付き、その陰に立寄ると、ここは雪も吹込まず風も来ず、雪あかりに照された道路も遮さへぎられて見えない別天地である。い

つも継母に叱られると言つて、帰りをいそぐ娘もほつと息をついて、雪にぬらされた銀杏うがえし返びんの鬢なを撫なでたり、袂たもとをしぼったりしている。わたくしはいよいよ前後の思慮なく、唯酔の廻つて来るのを知るばかりである。二人の間に忽ち人情本の場面がそのまま演じ出されるに至つたのも、怪しむには当たらない。

あくる日、町の角々に雪達磨ゆきだるまができ、掃寄せられた雪が山をなしたが、間もなく、その雪だるまも、その山も、次第に解けて次第に小さく、遂に跡かたもなく、道はすっかり乾いて、もとのように砂ほこりが川風に立迷うようになった。正月は早くも去つて、初はつ午まの二月になり、師匠むらくの持もち席せきは、常磐亭から小石川指さすヶ谷が町の寄席にかわつた。そしてかの娘はその月から下座をやめて高座へ出るようになって、小石川の席へは来なくなつた。帰りの夜道をつれ立つて歩くような機会は再び二人の身には廻めぐつては来なかつた。

娘の本名はもとより知らず、家も佐竹とばかりで番地もわからない。雪の夜の名残は消えやすい雪のきえると共に、痕あともなく消去つてしまつたのである。

巷ちまたに雨のふるやうに

わが心にも雨のふる

という名高いヴェルレーヌの詩に倣<sup>なら</sup>つて、もしもわたくしがその国の言葉の操<sup>あやつ</sup>り方<sup>かた</sup>を知つていたなら、

巷<sup>ちやう</sup>に雪のつもるやう

憂<sup>うれ</sup>ひはつもるわが胸に

あるいはまた

巷<sup>ちやう</sup>に雪の消ゆるやう

思<sup>おも</sup>出は消ゆ痕<sup>あと</sup>もなく

.....

とでも吟じたことであろう。



# 青空文庫情報

底本：「荷風随筆集（下）」岩波文庫、岩波書店

1986（昭和61）年11月17日第1刷発行

2007（平成19）年7月13日第23刷発行

底本の親本：「荷風随筆 一〜五」岩波書店

1981（昭和56）年11月〜1982（昭和57）年3月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：阿部哲也

2010年4月15日作成

2010年11月5日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 雪の日

永井荷風

2020年 7月18日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>